沖縄の風土と文化に基づいた観光の展開

小谷友紀

キーワード：沖縄，安・近・短，地域観光，風土と文化，モデルコース

1. はじめに

沖縄県の観光・リゾート産業は，2004（平成 16）年に策定された沖縄振興計画において，自立型経済を構築するためのリーディング産業として位置づけられている。一方，観光・リゾート産業は総合産業といわれ，自然・歴史・文化・風俗から交通・宿泊・スポーツ・レクリエーションにいたるまできわめて広い分野にわたるため，なかなか捉えにくく，十分に網羅することは難しい。沖縄の観光・リゾートの昨今の位置づけを踏まえ，その振興・発展を図るために，沖縄が有する観光・リゾート資源をいかに活用するかが，これからの肝要な課題である。

本研究では，沖縄観光の現状を詳しく調査し，今後を展望することを目的とする。その過程では，沖縄観光の背景となる風土と文化に着目するとともに，魅力的なコースも紹介したい。

研究方法は，大きく分けて，文献・資料の検索と収集・分析，および実地調査（現地調査・聞き取り調査）の二つである。観光客数などの具体的なデータについては，沖縄県観光商工部観光企画課および沖縄観光コンベンションビューローの資料を多数参照した。また，沖縄人も認める観光地や，普段の食事などが知りたかったため，大学の沖縄県出身者に話を聞いた。

私自身，大学 1 年の冬（2002（平成 14）年 2 月）に沖縄に行ったときに，沖縄の美しさと様々な表情に魅せられ，それ以来とりこになった。しかし，情報を集められずに，有意義な自由時間を過ごすことができなかったことが心残りであった。観光客として，より充実した沖縄時間を過ごすにはどうすればいいのか。また，観光に多くを依存している沖縄の人々の生活にとって，よりよい観光とは何なのか。この両者の視点から，沖縄観光を研究したい。

2. 沖縄観光の現状

日本人の最近の観光行動を示すキーワードは，「安・近・短」である。バブルの時代も終わり，平成不況が続いた結果，人々は安く・近場で・短期間の観光を楽しむようになった。不景気だから，できるだけお金をかけずに行きたい。移動に時間をかけたくない。とくに社会人は長期の休みが取りにくい。このようなことなどが要因と考えられる。また，2001（平成 13）年の米国同時多発テロの後，海外旅行への懸念が広がり，最近の国内旅行の需要が増加したことも一因である。

観光客のニーズも多様化している。有名観光スポットをガイド付きでまわるだけでは物足りなくなり，自分でコースを考えたり現地の人と触れ合ったりして，よりその土地を深く感じる観光を好む人が増えている。また，日ごろの疲れを癒すため，何もせずにリゾート気分に浸ったりしたい人，おいしいものを食べたり，ショッピングを堪能したりしたい人などである。これらの目的地に，沖縄県の選ばれる割合が高くなる傾向にある（沖縄県観光リゾート局, 2005, p. 6）。

沖縄観光は，1972（昭和 47）年の本土復帰までは慰霊訪問団が中心であったが，それ以後は美しい海をおもな観光資源として大きく発展した（沖縄県, 2005b, p. 1）。図 1 より，沖縄県への入域観光客数は，1999（平成 11）年から 2001（平成 13）年にかけて一時的に停滞がみられ

たが，その後 2003（平成 15）年に 500 万人を超えるまでになった。これは，観光振興にむけた施策の展開や，沖縄文化への全国的な関心の高まりによるものと考えられる。

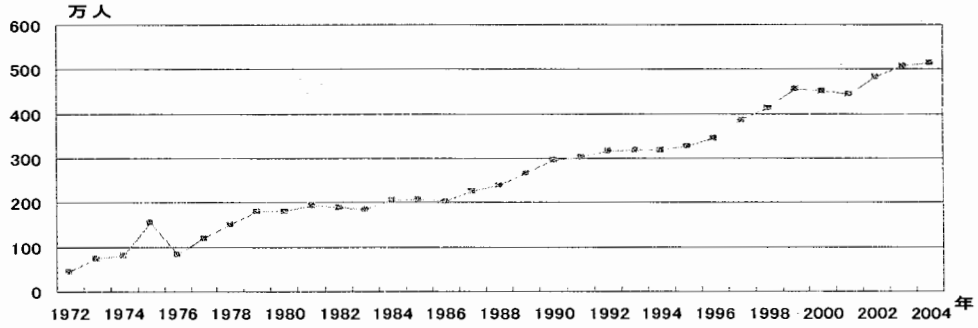

図 1　年次別入域観光客数　　出所：沖縄県(2005a, p. 32)より作成

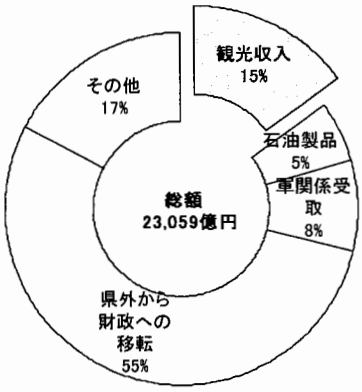

図 2　県外受け取りの内訳（2002 年度）

出所：沖縄県(2005a, p. 44)より作成

一方，図 2 より，2002（平成 14）年度の県民所得総計のうち，県外受け取りに占める「観光収入」の比率は，約 15%であった。これは，「県外から財政への移転」に次いで大きく，産業としては最も大きな比率を占めていることが分かる。また，県外受け取りの推移をみると，総額がやや増加しているのに対し，観光収入が常に 15～20%の比率を占めていることから，観光産業が沖縄県にとって非常に重要な産業であるといえる。

なお，「県外から財政への移転」は，「県外から財政への経常移転」と「国庫から資本取引」の合計である。

入域観光客数が年々大きく増加しているのに対し，県外受け取りの総額は微増にとどまり，しかも観光収入の割合がほぼ一定であることから，観光客一人当たりの個人消費量が低下しているといえる(図省略)。この観光客一人当たりの個人消費量を増加させることが，沖縄観光振興の大きな課題だと考えられる。

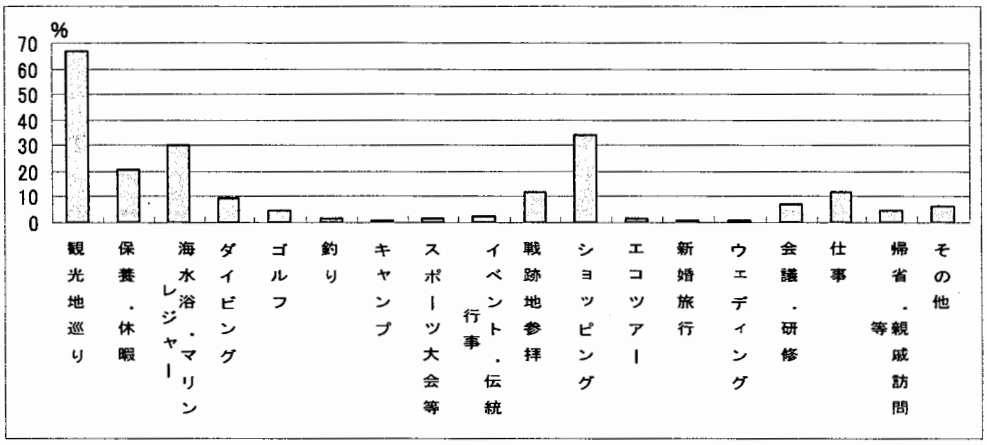

図 3　県外客の観光内容(2004 年度)　　出所：沖縄県(2005a, p. 42) より作成

県外客の観光内容については，図 3 より，「観光地巡り」・「ショッピング」・「海水浴・マリンレジャー」が人気であることが分かる。また，県外客の多くは沖縄本島南部を訪れている。2002（平成 14）年に完成した，本島北部国頭郡にある美ら海水族館や，離島では石垣島周辺も人気が高い(図省略)。

3. 沖縄の風土と文化

沖縄県は，日本の最南西端に位置する。図 4 より，地理的には九州から台湾までの琉球弧のほぼ南半分を占める琉球列島をさし，北緯 26 度，東経 127 度を中心とする広大な海域に点在する大小 160 の島々（面積 0.01 km^2以上）からなる。県土面積は全国 47 都道府県中 44 位だが，県域の広がりでは，那覇から与那国島までの距離が東京から徳島県までの距離に等しく，東西約 1,000 km，南北約 400 kmの海域に散在する，全国一広域にわたる県である（沖縄観光コンベンションビューロー, 2005a, pp. 9-10)。

沖縄県は，日本唯一の亜熱帯海洋性気候に属し，夏は南東風，冬は北東風が強い。黒潮の影響で冬季も暖かく，年平均気温 22.7℃，最低気温平均 20.5℃（いずれも那覇市）と，降雪，降霜もほとんどない。温暖な気候環境の中で，美しい白砂の海岸線やサンゴ礁，世界でも屈指の透明度をもつ海中景観など特色ある自然景観に恵まれている。

また，地理的条件を活かし，14 世紀からの交易によって，他国（琉球王国時代は日本も含む）の文化を積極的に取り入れ，礼節を重んじ，友好的に近隣諸国と付き合ってきた。また，それと同時に，他国によって征服されたり，太平洋戦争末期の沖縄戦では住民をまきこんだ激しい地上戦に見舞われたりと，悲しい歴史があったことも忘れてはならない（新城, 2004, p. 230)。県域が広域にわたることによる地域ごとの風土や歴史の違い，他国文化の取り入れ方の違いなどにより，地域ごとに異なるさまざまな表情を生みだしているため，地域観光が盛んである。風土と文化によって培われた独特の伝統芸能や伝統工芸・琉球料理・戦跡などの観光・リゾート資源を有している。

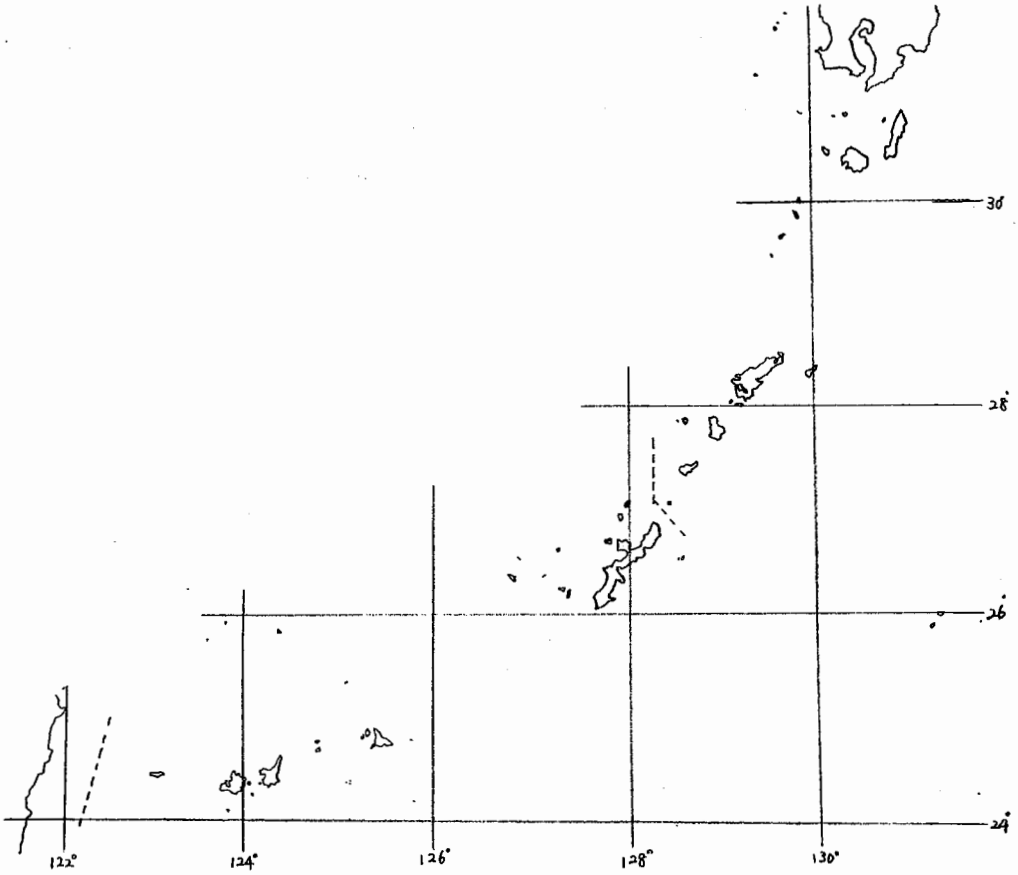

図 4　沖縄県の位置

出所：『新版日本分県地図』より作成

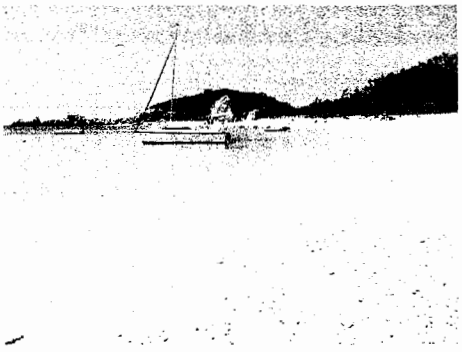

写真 1　阿波連ビーチ（渡嘉敷島）

2005 年 9 月 28 日，本人撮影

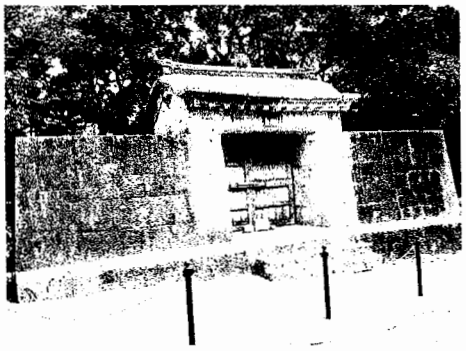

写真 2　園比屋武御嶽石門（ソノキャンウタキイシキモン）

2005 年 9 月 26 日，本人撮影

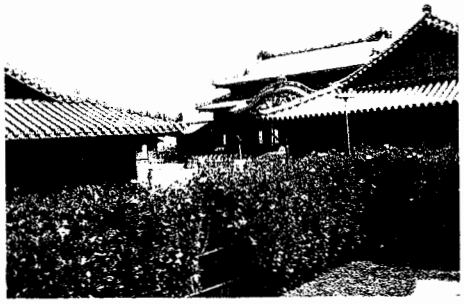

写真 3　首里城跡
2005 年 9 月 26 日，本人撮影

写真 4　旧海軍指令壕
2005 年 9 月 27 日，本人撮影

写真 5　琉球料理の一例
2005 年 9 月 28 日，本人撮影

写真 6　大手スーパーの泡盛コーナー
2005 年 9 月 25 日，本人撮影

4. 沖縄観光のモデルコースの立案

沖縄観光が安価にできるに越したことはないが，「安かろう，悪かろう」では観光客は満足できない。せっかく行くなら充実した沖縄時間を過ごしたいと思うのは，沖縄観光が初めてかリピーターかにかかわらず，観光客全員の望みである。そのためには，沖縄観光の「質の向上」が不可欠である。例をあげると，沖縄固有の風土と文化を活用した，付加価値の高いエコツーリズムや，世界遺産，伝統技術体験の推進などである。沖縄旅行に不安を感じるビギナーのために，観光情報発信基盤を整備することも大切である。

一方，観光が生活を支えている沖縄人にとって，観光産業の振興は死活問題である。観光客一人当たりの消費額をあげるために，オプションメニューを増やしたり，リゾートショッピングを定着させたりすることなどがあげられる。また，沖縄本島より滞在時間が長い傾向のある離島観光も推進されている。しかし，観光を推進するにしても，現在すでに飽和状態に近づいており，新規マーケットを開拓しなければならない。具体的には，沖縄そのものの風土と文化を活かした，修学旅行の誘致，リゾートウエディングなどがある（沖縄観光コンベンションビューロー, 2005b, pp. 6-7）。

また，観光において，現地までのアクセス方法や，現地での移動方法も重要な要素となる。これらの交通条件が，限られた時間を有効活用し，沖縄時間の密度を高くするために不可欠だからである。

これらを踏まえ，次のような3種類のモデルコースを立案した。

①よくばりコース：ビギナー向けで，沖縄本島南部を安価・短期間でまわる。
沖縄の風土と文化の凝縮を味わうコース。

②のんびりコース：リピーター向けで，ゆっくり離島を巡り，島ごとの魅力を満喫する。
より深く沖縄を感じることができるコース(地域観光)。

③修学旅行コース：学生向けで，沖縄の風土と文化を学ぶ。
過去を見すえることで，未来を見つめることができるコース。

同じコースでも，季節によって表情を変えるため，何度も訪れることをおすすめしたい。

5. 沖縄観光の今後の課題

少子高齢化社会の中で，増加する高齢者は人数の多さと，財政負担の面からみても大きなウェイトを占めているが，観光客の年齢別客層をみると，高齢者(60歳以上)の割合は約11%にすぎない(沖縄県, 2005b, p. 1)。余暇時間を比較的自由に使える高齢者を沖縄へ誘致することは，今後の沖縄観光の振興に不可欠であると考えられる。そのためには，きめ細かく質の高いサービスを提供できる観光産業の人材育成，観光のバリアフリー化促進などが求められる。全駅エレベーターを設置した，ゆいレールの開業など，バリアフリーに向けて動き始めてはいるが，まだまだ不十分な観光地も多いのが現状である。

6. おわりに

私自身，沖縄の美しさに魅せられ，よりよい観光について調べてみたいと思って始めた本研究であるが，その過程で，さまざまな問題を抱える沖縄の裏側も見えるようになってきた。

近年，沖縄観光は多様な展開をみせ，「アウトドア」や「食」のほか，「体験型」の旅行が好まれている。観光客のニーズの多様化に促され，往来の団体ツアータイプに代わり，レンタカーで移動してそれぞれの趣向やスタイルを追及できる，自由な観光が求められるようになってきた。行動範囲が広がった観光客にとって，地元の人々との触れあいは，より深く沖縄を感じることができると大きな魅力になっている。

一方，観光が生活の多くを支えている沖縄人たちは，官民一体となって観光客を誘致し，ありのままの沖縄をみてほしいと感じている。沖縄を訪れる観光客とそれを受け容れる沖縄人の期待や利益は，ときにぶつかることもあるが，同時に高めることもできる。人と人が交わり，両者の接するところにあるものが，「沖縄の風土と文化に基づいた観光の展開」なのである。

本研究を進めるにあたり幾度も感じたことは，沖縄は独自性を守ろうとするひたむきさと，新しいものを受け容れようとする柔軟さ，という二つの相反する姿勢を併せもっているということである。これらを融合させることで，地域ごとに違った，新鮮な魅力を生み出している。沖縄が日本に復帰し，観光地として知られるようになってからの歴史はまだまだ浅い。これから沖縄が，そこに住む人々が十分満足するように発展し，同時に沖縄観光も一層振興することを願ってやまない。

参考文献

沖縄観光コンベンションビューロー (2005a)：『美ら島―沖縄観光情報ファイル―』781p.

沖縄観光コンベンションビューロー (2005b)：『沖縄観光ガイドブック』15p.

沖縄県（2005a）:『観光要覧（平成 16 年度版）』127p.
沖縄県（2005b）:『沖縄観光の現状・課題及び施策展開―「質の高い観光・リゾート地の形成」を目指して―』12p.
沖縄県観光リゾート局（2005）:『沖縄県における旅行・観光の経済波及効果』6p.
新城俊昭（2004）:『高等学校　琉球・沖縄史』311p.
人文社編集部(1989）:『新版日本分県地図』人文社

The Evolution of Sightseeing based on Climate and Culture of Okinawa

KOTANI Yuki

Key Word : Okinawa, cheap/near/brief, regional sightseeing, climate and culture, model course